

平成三〇年度

中世文学会春季大会

シンポジウム・研究発表要旨

シンポジウム「なぜ西行なのか」趣旨

司会 上智大学 西澤 美仁

三十年ほど前にあたる一九八九年の七月、和歌文学会は西行八百年御遠忌に関連付け、「西行と新古今の世界」という題目でシンポジウムを開催した。和歌文学にほぼ限定され、しかも西行没後まもない新古今時代に限定されて、西行和歌の特異性、時代性が対象となった。西行享受の長い歴史の中のごく最初期における和歌のみが扱われたことになる。

本年、二〇一八年は一一一八年生まれの西行生誕九百年である。四月には西行桜・江口といった西行能が国立能楽堂で公演され、十月十一月には和歌山県立博物館で前代未聞の西行展覧会「大西行展」が企画されている。海外でも、明年のエストニア、タリン大学での歌の祭典に西行学会がその一環としての参加する予定であり、昨年夏にその前哨戦として、ポルトガルでのE A J S（ヨーロッパ日本学協会）リスボン大会に、サテライトフォーラムという形で、統一題「西行の旅と文芸―時空の超越―」のもと、「旅する詩人―西行と世界の詩人たち―」、「西行文芸の翻訳と翻案」という2点のパネルが出品された。

生誕九百年の企画は多岐にわたたり、日本文化の原風景ともいえるべき西行和歌が享受されてゆく長い歴史を、時間空間を越えて大きな視野で捉えていて、三十年間の西行研究の進展をよく反映してはいようが、もうひとつ何かが足りないような気がする。それは多分、中核になるべき問題意識として、「なぜ西行なのか」という問いかけが十分ではないからかもしれない。和歌しか詠まなかった西行が、なぜ和歌以外のジャンルにまで多くの足跡を残し得たのか。

中世文学会が企画する今回のシンポジウムは、説話・連歌・能、という中世文学を代表するジャンルが被弾したところの西行を、それぞれの専門分野の中で深く検討すると共に、共通テーマ「なぜ西行なのか」に向けて、近世・近代そして我々の現代という時代に流れ込んでくる西行に対して、中世の西行、を明示する、ことができれば、と考えている。

〈この世を見守る西行〉と〈構造としての西行〉

兵庫教育大学 山口 眞琴

小考に課せられたのは、中世の説話領域における西行について考えることだが、そもそも、最多入集を果たした『新古今和歌集』よりあと、西行の大きな影響力を物語るものとして、鎌倉時代中期成立の『西行物語（絵巻）』と同後期頃に編まれた『撰集抄』を挙げることに異論はないだろう。実際に『西行物語』は没後かなり早くから生成・流布した西行説話を集成したものであり、また『撰集抄』の語り手・書き手としての西行像にもその多くが反映されている。両テクストを取り上げる所以だが、それに伴い、シンポジウムの「なぜ西行なのか」という共通テーマも、「なぜ西行の絵伝が作られるのか」、「なぜ西行が仏教説話集の表現主体に起用されるのか」という問題に読み替えて、それらの解明につながるようなアプローチを試みることにする。

その作業仮説として、〈この世を見守る西行〉と〈構造としての西行〉という二つの包括的な西行像を想定してみたい。境界的な存在感を示す前者は、奇跡の往生者西行の生涯を描く『西行物語』に、機能性から見た後者は、遁世聖らへの結縁を繰返す西行が語る『撰集抄』に、それぞれ際立つものだが、もとより廻国と邂逅をめぐる枠組みに基づく両テクストに共有されるものでもある。今回は、主として〈この世を見守る西行〉の源泉と形成過程について検討するが、その中で〈構造としての西行〉が重層することにも留意したい。具体的には、それらの典型的な事例として「沈淪不遇を慰める西行像」に注目する。それは、崇徳院亡魂の鎮撫はむろんのこと、西行の無常・遁世に関する述懐歌の位置づけにも淵源する。その点を確認した上で、鎌倉前期〈中期の『発心集』『今物語』『古今著聞集』などの西行説話にも構造的に踏まえられた件の西行像が、さらに隠岐配流の後鳥羽院と関わることで、平安京を鎮護する垂迹神のような偶像化を促した可能性を窺ってみたい。その背景としては、崇徳院以上に強調される鳥羽院と西行の因縁、それを象徴する場としての「鳥羽殿」が重要であったと考えられる。

能 ワキが似合う西行

横浜国立大学 三宅 晶子

能にとつて西行は、なくてはならない存在である。

『貞和五(349)年春日社臨時祭次第』は、能の曲名らしきものがわかる現存最古の資料であるが、そこには巫女の演じた猿楽二番の内に「憲清が鳥羽殿にて十首の歌詠みてある所」(原文はカタカナ)がある。『西行物語』に見えるエピソードを上演したらしい。西行の和歌説話は、早くから能の題材として利用されたことがわかる。

世阿弥時代では、『申楽談儀』に「西行の能」に関する言及がある。西行がワキで登場する(実方)であろうとの通説を否定して、岩波日本古典文学大系『謡曲集上』(1960表章校注)では、〈西行桜〉を新たにその該当曲として扱った。筆者はこれが定説化したように考えていたが、近年でも〈西行桜〉は世阿弥ではないとの説も見られる。西行の愛でた老木の桜の精が登場して、春爛漫の中優美な舞を舞う遊舞能の名作であるので、世阿弥作か否かは、かなり重要な問題であろう。〈西行桜〉も〈実方〉も、ワキは西行である。

『能本三十五番目録』には「ヨシノサイキヤウ」(散逸曲)の名が見えるし、禅竹作と考えられている〈雨月〉や、後に『雨月物語』にも利用された〈松山天狗〉においても、西行はワキとして登場する。なぜいつもワキなのか。おそらく先行する説話などにおける西行像がすでに、そのような方向性を持っているのだから、能に登場する有名歌人達の誰がシテとなり、誰がワキとなるのかなども、比較してみたい。

また、直接西行は登場しないが、『撰集抄』などで有名なエピソードを利用した世阿弥作の〈江口〉や、〈西行桜〉を意識しつつ『新古今和歌集』所収歌を主要素材として用いている観世信光作〈遊行柳〉などもある。その他にも西行歌が利用されることは多い。「歌人西行」と「西行の歌」も区別して考える必要があるだろう。

連歌と西行の距離

いわき明星大学 松本 麻子

芭蕉と西行の結びつきは、「西行の和歌における、宗祇の連歌における：その貫道する物は一なり」(『笈の小文』)を挙げるまでもなく深く、近世俳諧と西行の関わりも極めて密接である。一方で、その前身である室町の連歌は、俳諧と比較すると西行を特別重く扱っているわけではない。西行自身は僅かながら連歌を残し、連歌という文芸について言及した。西行の和歌に短連歌的発想が見えると指摘した稲田利徳の論もあり、西行の和歌と短連歌の距離は近い。しかし、『菟玖波集』に採られたのは、西行の歌集には見られない連歌、三付合のみで、そのうち二つは雑体の「誹諧」に収められている。安直な比較と誹られるだろうが、それでも定家の二六付合、家隆の二三付合の入集数と比べると、その差はやはりある。

西行の歌を本歌として踏まえた付合の例も少なく、たとえば『新撰菟玖波集』三六〇〇付合のうち、西行歌を本歌として付けたと思しいものは、私に数えると一〇付合にも満たない。ただし、矛盾するようだが連歌師たちにとつて、西行は偉大な歌人であったことは相違ない。宗長が西行の庵跡をなつかしみ、伊勢市宇治の西行谷を訪れたことはよく知られている。また、奥野純一の指摘のように、西行とゆかりのある伊勢の神官たちが長きにわたり連歌を行ってきたことも事実である。肖柏は『六家抄』を著し、『異本山家集』に近い集から西行歌を抄出した。

そこで、今回は室町の連歌師たちが西行の歌をどのように扱い、考えていたのかに迫ってみたいと思う。まず西行の歌と連歌資料との関わりを中心に検討するが、実はこれは室町という時代が西行をどのように扱ったか、という問題にも繋がるのではないかと予測している。連歌と西行との「距離」について、つまり、西行の和歌がどのように受け入れられたかを考えることで、西行という歌人の特徴を明らかにしようという試みである。

『北院御室御集』の成立時期―天王寺宮をめぐる―

早稲田大学大学院研究生 金子 英和

仁和寺御室六世、後白河院皇子守覚法親王の家集『北院御室御集』の諸本は、一四五首の第一系統と一七八首の第二系統とに大別される。成立について下釜逸子氏は、第一系統は自撰で『御室五十首』詠を一首しか含まず、詠年を確定できる歌が寿永を下限とするところから、寿永年間から文治三年ごろまでに成立したとする。また第二系統本は他撰で『御室五十首』『正治百首』詠を含むところから、それ以後の成立とし、編者の可能性のある人物として書陵部本書写者の靈元天皇を挙げた。

第一系統が自撰で、第一系統・第二系統の順に成立した点に異議はない。ただし、天王寺宮哀傷歌(第一系統・一三五番歌、第二系統・一六八番歌)を考証することにより、第一系統の新たな成立時期を提示することが可能となる。

天王寺宮六條の御八講に参らんとてちかきわたりをかりてやとり
 給けるにやまひを概をもくなりてもとのすみかへもかへらてかくれ給

にし後門この・あまたある前をすくとてよめる

一すちにもものそかなしきかりにすむあるしたえにし青柳のいと(一三五)

小田剛氏は、「天王寺宮」を後白河院皇子円恵法親王に比定した。しかし円恵は法住寺合戦で殺害された人物であり、詞書とは入滅状況が大きく異なる。円恵を充てるのは不適切で、後白河院皇子定恵法親王とするのが妥当である。「六條の御八講」は後白河院追善のために三月に修された長講堂の法華八講と考えられ、定恵が参加しようとした可能性は高い。定恵は建久七年四月一八日に腫物を患い入滅した。当該歌には春の景物が詠まれることから詠歌年次は翌年春以降と考えられる。即ち第一系統の成立は建久八年春以降、『御室五十首』成立以前となる。

次に第二系統であるが、二〇〇〇年代に永仁二年書写奥書を持つ史料が紹介され、靈元天皇の可能性はなくなつた。改めて第二系統を読むと、内部徴証から、編纂者はやはり守覚と考えられる。以上の考察過程を発表で示す。

『我が身にたどる姫君』の女四宮―「はなばな」とした特質をめぐって―

日本女子大学大学院生 伊達

舞

『我が身にたどる姫君』は、水尾帝の皇后宮と関白の密通により生まれた我が身姫を中心に据えつつ、「皇后宮―女三宮―後涼殿」（皇后宮系統）と「中宮―女四宮―藤壺」（中宮系統）の二組の母子三代の対立的関係を軸に語られる。彼女らは物語構造上重要な位置を占めるにもかかわらず、従来皇后宮系統に焦点を据えた論が多く、中宮系統は傍系的に扱われてきた。なかでも女四宮については、嫉妬のあまり夫を抓り嚙るといった戯画的な面が誇張され、その人物造型の意義に関しては殆ど言及されていない。本発表では、女四宮に付与されている「はなばな」とした特質に着目し、中宮系統のなかでの彼女の役割、ならびに物語全体における立ち位置について検討する。

女四宮は、嫉妬深いながらも、「はなばな」とした魅力により夫中納言を惹きつける人物として描かれる。本物語において「はなばな」の語は主に中宮の血縁者に用いられ、中宮系統の女君を特徴づけているほか、このような女四宮の魅力が母中宮に倣ったものとされるなど、母娘間での連鎖性が認められる。娘の藤壺が一宮出産後に三条帝を惹きつけた「はなばな」とした姿も、女四宮の特質を受け継いだものであり、巻五以降に語られる藤壺の葛藤に重大な影響を及ぼしている。

さらに、作中で唯一我が身姫の美しさが「はなばな」と表現される箇所は女四宮の「はなばな」とした美しさが語られる場面と連続しており、両者の描写が非常に似通っていることから、女四宮が我が身姫に対置する存在として意識されていることも明らかである。

『我が身にたどる姫君』が、先行物語で幅広い意味に用いられてきた「はなばな」の語の多義性を意図的に利用して、中宮系統の母子を描き分けつつ連鎖的に特徴づけていることにも言及しながら、そこから浮かび上がる女四宮の重要性を指摘したい。

『徒然草』第三二段考―「その人」の解釈をめぐる―

大阪府立大学大学院生 池上 保之

『徒然草』第三二段は王朝物語を思わせる優美な章段である。兼好が長月二十日ごろ、ある貴人と共に月を見歩いていたところ、その貴人がある人の家を訪れ、兼好は外から様子をうかがっていた。しばらくたって貴人は出てきたのだが、見送る家の主は、すぐに家の中へ入ってしまうのではなく、しばらく月を眺めていた。その奥ゆかしい様子を兼好は高く評価している。しかし、「その人」はほどなく亡くなったということだった。

本章段について、現代の解釈では、貴人が愛する女性の家を訪れたものとされておられ、これがほぼ通説となっている。本文中では、宿の人物は「その人」としか書かれていないが、場面の情景、長月二十日の夜という日時、男性を見送っている様子、また前段第三一段との関係などから、「その人」は女性とされ、一段は貴人の逢瀬の場面であると解釈されている。

しかし、このような解釈は実は近代以降通説化したものである。近世期においては、事情は大きく異なっている。絵画資料を見ると、『なぐさみ草』（慶安五年跋）では、宿から見送る人物は男性として描かれている。これ以降の版本の挿絵においても、男性で描かれる例は少なくない。また、注釈書類においても、女性と明言するものは僅かで、多くは貴人と宿の人物との交流は、友人関係として捉えられており、男性と解釈されていた可能性が高い。

本文には「その人」としか書かれていないために、様々な解釈がなされてきたのである。本表では、「その人」についての解釈を具体的な資料を提示し、その変遷を辿ってみたい。そこでは時代の影響も受けつつ、多様な解釈がなされてきたことがわかる。また、その上で兼好が多様な解釈を可能とする「その人」という本文を選択したことの意味も考えたい。

『大学聴塵』の生成に関する再考

大阪大学大学院生 張 硯君

大東急記念文庫蔵『大学聴塵』は、清原宣賢の自筆になる漢籍『大学』に対する注釈書である。従来の研究において、『大学聴塵』は宣賢による『大学』講義の手控であり、一条兼良撰『四書童子訓』から大いに影響を受けて成立させたものだとされてきた。

発表者は以前、『大学聴塵』と『大学』講義に関わる聞書抄である「林宗和聞書抄大学抄」との関連性について考察し、林宗和が列した天文年間の講筵において、『大学聴塵』とは別の講述書が宣賢に使用されていたことを指摘した（「林宗和聞書抄『大学抄』の生成とその価値」講述聞書における校合の実態をめぐって¹、第²回国際日本文学研究会における口頭発表、於国文学研究資料館、二〇一七年十一月十二日）。さらに、該書は『大学聴塵』より先に成立したと考えられる。このことを踏まえ、本発表は、『大学聴塵』と講義の講述書との関係性に着目し、『大学聴塵』の生成のあり方に対する再検討を目的とする。

研究方法として、まず講述書の一伝本にあたる東洋文庫蔵梵舜書写本『清家四書抄』と『大学聴塵』との二書に対して比較照合を行う。とりわけ講述書の内容が『大学聴塵』でどのように共通し、あるいは相違するのかを調べる。また、講述書に関わる撰取のあり方に注目し、形式上の特徴と内容の取捨の様相から宣賢の利用態度を図るとともに、それが『四書童子訓』とどう融合させたかを究明する。

本発表では、『大学聴塵』の生成に関して、清原宣賢は『四書童子訓』を大いに参照したと認められる一方、講義の講筵においても使用された講述書を編纂の基盤とし、とりわけ字義・語釈レベルの内容を積極的に撰取していたと主張したい。

能《野宮》における聖俗の転換―鳥居・車をめぐるイメージから―

東京大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 中野 顕正

本発表では、能《野宮》における鳥居・車の描かれ方に注目し、作り物（大道具）等によって提示されるモチーフが能作品においていかなる物語内容上の機能を果たしているのかについて、テキスト解釈と演出的考察の両面から検討する。

《野宮》は『源氏物語』賢木巻を典拠とし、《野宮の旧跡を訪れた僧の前に六条御息所の霊が牛車に乗って現れ、往時の記憶を語る》という内容で、舞台正面には野宮の鳥居の作り物が据えられるという特異な演出となっている。従来この作品は『源氏物語』との関係から様々に論じられ、鳥居についても御息所の執心・罪の象徴として理解されてきた。本発表ではまず、終曲部において鳥居はむしろ御息所の亡魂を解脱させる存在（当時の神道言説に依拠）として描かれていることを確認し、終曲に至って鳥居のイメージが妄執から救済へ転換していること、それゆえこの場面は（御息所が救済者の存在に気づき、執心を捨てようと決心する）場面として解釈されるべきことを論じる。次いで、そうした中で御息所が再び牛車に乗って去ってゆくという結末について検討し、御息所の屈辱・妄執の象徴であった牛車が救済の象徴（三車火宅喩に依拠）へと転換していることを確認する。その上で、これが先行曲《江口》の構想を踏まえていること、それは作品成立当初には演出面にも及んでいたことを推定する。最後に、そうした鳥居・車をめぐる妄執から救済へのイメージ転換を経てなお、御息所の救済の成否が結局は曖昧にされる形で終曲を迎えている点に注目し、（救いの可能性を得、執心を捨てようと一度は決心しながらも、結局は救われきれない御息所）像を描く点に作品の構想が存在していたことを論じる。

すなわち、『源氏物語』との関係だけでなく当時の宗教言説や他の能作品との関わりの中で《野宮》を捉え直し、ひいては能の作品構想法の一端を明らかにしようとするのが、本発表の目的である。

正徹句を含む「応永廿三年二月廿三日『賦何人連歌』」について

青山学院大学名誉教授 廣木 一人

「応永廿三年二月廿三日『賦何人連歌』」の連歌懷紙初折（二十二句）を最近入手した。現在、卷子に仕立てられている梅・松などの下絵のある繪懷紙（金銀泥下絵裝飾料紙）で、連歌史において次の四つの点で貴重な資料の出現と考えられる。

一は、紙背など以外に連歌懷紙の実例として極めて古い現存資料であることである。本資料は、装幀を原形に戻せば、大きさ、端作や賦物、表八句、裏十四句の書様、綴じ穴の存在など連歌懷紙として妥当であることから、連歌会から時を経ない時期の清書懷紙かと思われる。二は、この連歌が北野天満宮での足利義持を中心としたものらしく、將軍家の北野天満宮での連歌活動の一端を知り得る資料である可能性のあることである。三は、細川道歆・赤松満祐・安富宝密・東益之などの当時の主力武士が多く参加していること、さらに、連衆の半数に近い者が「応永廿一年頓証寺法楽百首」と重なり、和歌を含めた当時の武士の文芸活動の一端が窺えることである。応永期に連歌が武士の間に広く行われたことは、心敬の『ひとりごと』などによっても確認できるが、その作品はほとんど知られていない。本資料は二十二句のみではあるが、武士を中心とした百韻連歌の実例として現存最古のものと言い得る。四は、一句であるが正徹句が含まれることである。正徹は宗砌・智蘊・心敬など多くの主要連歌師の和歌の師であり、その文芸論や作品はその後の連歌に多大な影響を与えた。ところがこれまで、正徹自身の作品はまったく知られていなかった。

本発表では、まず、この連歌および懷紙が当時のものとして妥当かどうかを連衆、形態の検討を通して行い、無名の発句、第五句が義持の句であり、これが北野天満宮でのものである可能性を示し、さらに、正徹と連歌との関係を見、正徹の連歌が何故これまで見出せなかったのかに言及、最終的に本資料の価値について論じたい。

